

『じょんこの夢』

昔、若林に権右衛門という百姓が住んでいた。代々、肝煎（きもいり）役をつとめ、家はたいへん栄えていた。また、その屋敷の中には、大きなよのめの木が、屋敷を見下ろすようにはえていて、その木の上から時々天狗の鳴らす太鼓の音が、遠くまで聞こえたという。



権右衛門の家には、たくさんの奉公人が働いていたが、その中に「じょんこ」というたいへん正直な下男がいた。ある夜、じょんこが、下男の部屋で寝ていると、夢の中に白装束の天狗が現れて、

「わしは、この屋敷のよのめの木に棲む天狗であるが、この家を焼いて、もっとよい所へ移ることにしたい。」

と言って消えた。

じょんこは、驚いて跳ね起き、さっそく、このことを主人の権右衛門に告げた。そこで、権右衛門は、朝になると村中の人たちを集めて、じょんこの夢をみんなに語り、わしの家をみんなで守って欲しいと頼んだ。そこで、村人たちは、権右衛門さんの家を守る方法について相談をはじめた。

そして、在所の川から権右衛門の屋敷まで、みんなで力を合わせて地面を掘り、新しい川をつけて、万が一、火が出た時は、いつでも水がいっぱい流れるようにした。また、長桶（ちょうけ）やたらいに水をいっぱいはって、家のまわりにずらりと並べた。また、権右衛門はじめ、奉公人たちは、火を決して粗末にしないように気を配った。

すると、幾日か経ったある夜、じょんこが、いつものように寝ていると、再び白装束の天狗が夢の中に現れて、

「わしは、この家を焼こうと思ったが、みんなの信仰心が厚いので、どうしても火をつけることができず、困ったことになった。わしは、みんなに負けたから、これからは火の宮の森へ移ることにする。」

と言って、権右衛門の屋敷を飛び立ち、火の宮にそびえる大杉のこずえへ飛び去った。それっきり、権右衛門の家は焼けなかったという。

火の宮は、今も在江の宮（あるえのみや）として残っているが、天狗が棲んでいたという大杉は、風に倒れてしまっていない。また、権右衛門の子孫は、今も栄えているが、よのめの木は、枯れて今はないという。

(若林町伝承 守沢 政治 集録)